佳作賞受賞者

佳作賞
「インディゴの空」
『黄色い潜水艦』50号

島田勢津子氏

島田勢津子（しまだ・せつこ）
一九五五年神戸市生まれ。事務員、ライター、編集者、福祉関係の仕事などに就く。大阪文学学校研究科修了。在校中に機関紙「新文学」（現「樹林」）や校内誌に短編を発表。同人雑誌活動を始める。後に「黄色い潜水艦」同人になる。一九九九年／31号より三輪正道氏と共同編集者となり、51号現在まで編集人を務める。仏教大学通教部在学中。
二〇〇一年　作品集『イルカを待つ海』（編集工房ノア刊）が第三十回神戸っ子ブルーメール賞に入選。

神戸の文学賞

島田勢津子

長い間、同人誌に小説を書いてきました。最初の長篇を同人誌評に採り上げて頂いたことから、川崎彰彦さん主宰の「黄色い潜水艦」へダッシュしました。体験を文章化しつつ、現実からは飛翔しているような川崎氏の世界とそれに共感する方たちの雑誌です。そこへ、風変わりな恋愛コメディーを持ち込んだ私を、同人の方々は歓迎して下さいました。

当時私は軽躁状態で、前編を出したはいいが後編はどうなるのか予想もつかず、心身不調のまま一五〇枚の作品の帳尻を合わせた後は、鬱になってしまいました。それとは知らず、川崎氏は神戸の文学賞へと推して下さいましたが、お受けする自信がなく本当のことも言えず、曖昧なままになってしまったのです。その時の申し訳なさ、情けなさを、約二十年後の今回の受賞で、やっと晴らすことができました。

「照れず衒わず諦めず、必要なことを書く」ということが、教わったことのすべてでした。というのも、私がもたもたしているうちに川崎氏は二度目の病気で倒れてしまったからです。

今回佳作に選んでいただいた「インディゴの空」。私にとっては痛みを伴った作品です。私は、この作品のカオリという若い女性ほど強い人間ではありませんが、モノを創る女性が生活しながら創作を続けることの厳しさ、直面するさまざまな問題を、このように逞しく乗り越えていけたら、という一種の願望かもしれません。本当は絵描きでなく、もっと職人的な仕事にしたかったのですが、こうなりました。

体調や仕事や生活に振り回されて、なかなか一貫した姿勢で創作に取り組めない日々が続きましたが、ここ数年でようやく小説を正面に持ってくることが出来るようになりました。

編集をさせて頂いていることも大きいです。同人誌の仲間や先輩たちが、私に力をくれました。「黄色い潜水艦」という小さな灯火を絶やすことなく、少しでも多くの方に知っていただきたいという思いで、走ってきたように思います。

今回、佳作に選んでいただき大変嬉しく思っております。選考委員の皆様、本当にありがとうございました。

「インディゴの空」樹林小説同人誌評より抜粋

カオリは美術学校時代から修二と親密にしていたが、彼は突然失踪してしまう。諍いもしたが随分と貢いだのにと、悔しさと寂しさが尾を引いていた。学生時代、伊勢崎伸という画家の絵に惹かれたことがある。カオリはインターネットで自分のブログをインプットしておいた処、当の伊勢崎から彼女をモデルにしたという裸婦像の写真を送ってきた。彼女は違和感を覚えつつも、絵の助言が欲しかったこともあり、画家と交信を続けた。師と仰いだ伊勢崎はカオリの作品について丁寧な批評を寄せ、それなりに褒めてくれた。（略）主人公の中に空いた空洞とは男女間の空隙とも言えよう。（略）Indigoは深い悲しみの色かもしれない、性の伏魔殿の、人生の諸相の。　（佐々木国広氏）

「黄色い潜水艦」
一九八四年五月創刊。大阪文学学校の卒業生を中心に現在同人は十名。年二回発行。今年創刊二十五年現在51号。「風の神の琴」のコーナーでは、同人以外の方、文学だけでなく広いジャンルで活躍されている方たちのエッセイを掲載。関西一円の同人誌の方たちにも、執筆を願っている。第二回富士正晴全国同人雑誌賞ベスト20に入賞。